図書館における近代の成立

——フィラデルフィア図書館会社と「有用な知識」——

川　崎　良　孝

The Library Company of Philadelphia and the Diffusion of "Useful Knowledge"

KAWASAKI Yoshitaka

図書館史において近代公共図書館というとき，この「近代」という語は特殊な意味をもつ。「公費でまかなわれ」「すべての人びとに無料で開放され」「図書館法をもつ」といったこと，すなわち，これら3要素が制度的に確立された図書館を「近代」公共図書館とするのであり，それは19世紀中葉に成立したボストン公共図書館を塙矢とする。したがって近代公共図書館成立前史とは，多様な図書館および個人の図書館思想において，上述の要素がどの程度出現し，それらが「近代」公共図書館にどの程度近いかを決定すること，そして最後に，それらが全体として「近代」公共図書館に集約されていく過程を示すことにあった。この観点からの図書館史は，たとえば Tyler 論文に古典的な形であらわれている[1]。Tyler は，植民地時代の個人文庫からボストン公共図書館に至る6段階を考え，下位から上位への移行を前述の3要素によって判断している。また，図書館史においてビンガム青少年図書館，ピーターボロの図書館が評価されてきたのは，部分的にでも公費が使われていたからであり，フィラデルフィア図書館会社(Library Company of Philadelphia 1731年設立，以下 LCP と略記する)が重視されるのは，建前は会員制でありながらも，すべての人びとに公開されていたからであった。

ところで，近代公共図書館成立前史という場合，上述での「近代」の他に漠然ともうひとつの近代を含んでいる。それは社会科学や科学史などで使われる意味であり，その図書館史的な意味は「宗教性からの離脱」「知識の全般的な普及」などである。前者については「広範な主題にわたる蔵書構成か否か」「図書館を担った人びとが，どの程度宗派の影響力から独立していたか」といった問題として把握されてきた。後者については「図書館の担い手の考察」「図書館利用規定の分析」といった方向から，少数の研究がなされてきた。

この二つの近代は相互関連をもつものの，意識的に区別されることはなかった。それは「二つの近代の分離は無意味である」と，図書館史が示したからではない。単に「区別しなかった」あるいは「区別しえなかった」のである。その結果，制度的側面を重視した従来の「近代」公共図書館成立前史は，社会的脈絡のなかで図書館を把握するとか，歴史学，教育史，思想史，科学史といった関連諸学を視野に入れたうえで図書館を解釈するといったこととは無縁であった。近代公共図書館成立前史は，幅の狭い窮屈な範囲内に押し込められている。また，図書館史全体について森耕一氏は「いつ，だれが寄贈して，何々図書館ができ，何年後に蔵書がいくらになって，いつの段階で目録が整備されたとか，そういう図書館の成り立ち，発展を追っているものが多い[2]」

と指摘する。と同時に，広い視野，基盤にたっての図書館史を，これからの課題として訴えている。

従来の図書館史の是非はともかく，筆者はこうした二つの近代を分離することで，図書館史に活力あるいは領域を付け加えうると考えている。それは，従来の図書館史の壁を打破する試みでもある。本稿で扱うのは「近代」公共図書館と LCP との関連ではない。LCP における近代の成立である。その場合，LCP および Franklin を探るときの鍵というべき「有用な知識 (useful knowledge)」という語の内容を，具体的な形で明確化していく。この過程をつうじて，LCP の基本的性格が明らかにされ，歴史上での位置が決定されよう。この目的のため，Thomas Bray の図書館思想との比較が積極的になされる。Bray と LCP とを比較することは，前者から後者への図書館思想の発展を追う歴史研究であるとともに，約1世代を隔てた二つの典型的な思想を比較する類型的研究でもある。しかし重点は LCP にあり，Bray の図書館思想は，LCP の歴史的性格を決定させるための補助的役割を果すだろう。

1

Brooks はアメリカ人の基本的性格を代表する人物として，Jonathan Edwards と Benjamin Franklin とを挙げる[3]。ピューターリンの敬虔を源泉とする Edwards の哲学は，Emerson の超越主義を経て，主要な作家の超然とした作風をもたらし，それは現代アメリカ文化の非現実主義に至る。他方，ピューリタンの実生活を源泉とする Franklin の哲学は，ユーモア作家を経て，ビジネスマンの生活に浸透していく。「高級な人 (highbrow)」としての Edwards の系譜は「高い理想」「大学での倫理」「学者臭い言いまわし」などを特徴とする。「低級な人 (lowbrow)」としての Franklin の系譜は「安物の現実 (catchpenny reality)」「実業での倫理」「街頭での言いまわし」などを特徴とする。Brooks はすべてのアメリカ人を両者の性格に還元できるとした。こうした二元論的解釈は，通俗的ではあるものの広く受け入れられている。「時は金なり」「信用は金である」といった諺は，上述の解釈とあいまって，Franklin を機転のきく楽天的な現実主義者に，あるいは拝金主義者にさえしている。

Rossiter は Franklin の政治理論の特徴として，「政治的プラグマティズム」「協同と妥協」「言論の自由」「経済的個人主義」「連邦主義」を特に指摘し，これらはアメリカ民主主義の根幹をなすものだとする[4]。これら5要素のなかでも「政治的プラグマティズム」が首位であり，他の要素は派生的に導き出されるといえよう。原理とか過程よりも結果 (fruit) を重視するものである。こうした姿勢は単に政治面だけにとどまらない。鍵になる言葉は「それは役に立つのか」とか「何のために」である。道路の舗装，夜警団の創設，病院などは役に立つのである。Franklin にとって理神論が真理に思えた時期があった[5]。しかし，たとえ真理であるとしても理神論は役立たないのであり，したがって不必要である。他方，彼自身は特定宗派に属さないものの，組織化された宗教を広く支持した。なぜなら，そうした宗派の存在が道徳の形成に寄与すると考えたからである。高位の道徳が浸透することは，自由で安定した社会の維持に不可欠であった。Franklin が教会へいくのは，信仰のためではなく道徳のためであった。以上のことから導き出されてくるのは，「実用」「効用」「効率」といった語であり，原理よりも結果を重視するという態度である。これはまた現代アメリカの技術的な経済構造をささえる考えでもある。この意味に

おいても Franklin は，アメリカの性格を，アメリカ人の性格を形づくったといえる。

ところで Weber[6] は，強い反営利性と隣人愛とを伴う禁欲的プロテスタンティズムが中産的生産者層と結びつき，ひとつのエートスを生み出したとする。神に選ばれているか否かが問題であり，自分が選ばれているか否かを知りえないとしても，選ばれていることの主要な兆候は，神の栄光を増し隣人愛を実践すること，善をなすことによってあらわれるとする。中産的生産者層にとって，神の栄光を増し隣人愛を実践する唯一の方式は，仕事に尽力し隣人が求めているものを安価に供給することであった[7]。勤勉なことは賞賛に値することであり，仕事に成功すること(すなわち，適正利潤を積みあげていくこと)は，勤勉さをはかる，したがって隣人に尽くし神の栄光を増したことを示す最も有力な指標となる。ここでは各々の行為ではなく生活全体が問題であり「前日よりも少しでも徳を増し勤勉であれ，そしてそれを積み重ねよ」とするのである。これは，Franklin の掲げる13徳と，そのまじめな実践に明確にあらわれている。ひとことでいえば「勤勉は利潤をもたらすのであり，その逆も真である。そして，この考えを聖とする」のである。ここにおいて「時は金なり」「信用は金である」といった諺は，聖なる意味あいをもつ。実際には，節制，勤勉，倹約によって生活を律し，適正利潤で他人の欲するものを懸命に供給する人間を，そして公共心に富んだ社会に役立つ人間を，そのために日々努力する人間を，好ましい人物とするのである。これは同時に，アメリカにおける人間像であり，また近代の人間像でもある。

次に，図書館史における Franklin あるいは LCP の扱いはどうであろうか。Thompson は以下のように LCP の基本的性格をまとめている。

> 図書館会社は，ここから利益 (profit) を求める人びとによって設立，維持，運営された。それ以前の多くの図書館は，愛書家のため，学識のため，あるいは宗教的，道徳的意図から設立された。他方，図書館会社は実際的性格 (practical natures) を有し，自己教育のためのものであった[8]。

さらに，簡略にアメリカ図書館史をまとめた Bolton は，次のように指摘した。

> アメリカの図書館活動における偉大な社会的，科学的推進者である Franklin は，図書館を強調した。それは熟練工 (skilled laborers) を助けるための図書館であった[9]。

最後に，LCP にたいする通説をまとめれば，下記のようになるであろう。

> 当時，印刷工，ガラス職人，商店員といった下層中産階級[10] (進取の気性に富んだ下層中産階級)の興味を満たす教育施設はなかった。彼らは力を合わせ，金を出しあうことで図書館を設立し維持していった。LCP 会員の主要な目的は，社会の階段を昇る手段として図書館を利用することにあった。彼らが求めたのは，正規の教育機関では得られない知識，すなわち有用な知識であった。

2

前節で示したような Franklin 像あるいは LCP の捉え方から導き出されるのは，まず「自分の技能を伸ばす，あるいは自己の経済生活を豊かにする」という観点からの「有用な知識」である。ジャントーの質問課題でいえば「最近たいへん景気のよい人を知りませんか。その人はどのような手段を用いたのだろう[11]」といった課題に代表される。LCP は Daniel Defoe の *The Complete Tradesman* を所蔵している。同書は，毎日を勤勉に暮し，適正利潤で物を売り，詳

細な簿記をつけるという，いわば実践的な経営学の本である。また *Gentleman's Library* は，生活全般，行儀作法にかんする本である。「下層中産階級の職人，商店員層」—「フランクリン」—「有用な知識」—「社会の階段を昇る」といったイメージからすれば，会員の生活（特にその経済面，技術面）に密着した蔵書構成を考えがちであるが，上述のような意味での「有用な知識」を含む図書は全く少ないのである。筆者は「……ただ実用的という言葉から，生活・職業に密着した蔵書構成を考えがちだが，事実はそれに反し，直接経済的利益（個人的な意味における経済的利益）に結びつく本は，Defoe の *The Complete Tradesman* ただ1冊であった」[12]と指摘した。要するに，「実用的」とか「有用な」という語を，個人的レベルにおける生活，職業と関連づけることは，誤りではないとしても，それでは不十分なのである。

さて，第2に考えられるのは「隣人に役立つ，あるいは直接社会の役に立つ」という意味での「有用な知識」である。「それは役に立つのか」とか「何のために」といった言葉は，Franklin の場合，この第2の意味での「有用な知識」にかかわると考えてよかろう。いうまでもなく，この種の知識はジャントー，LCP で最も重視され，かつ実践的，具体的な結果がでている。『自伝』を一読すれば，消防組合，夜警団の組織，病院設立など多くの社会的事業が，ジャントーでの議論と計画作成ののちに具体化されていったことが理解される。これらはすべて，隣人および社会に直接的に役立つのである。もちろん，Franklin にとって最初の「公共の性質を帯びた計画[13]」であった LCP 設立も同様である。この場合，LCP は社会改良，社会事業を企てる際の，情報蓄積の場としての役割を有した。Franklin 個人について調べてみると[14]，1747年彼は *Memoirs Historical and Military, Memoirs of the Most Remarkable Military Transactions* を注文した。そして両書は，フランスとスペインの脅威からフィラデルフィアを防衛するための義勇軍の組織化に，貢献したであろう。また，1750年には解剖学，化学，外科に関する本を Franklin は購入した。それらは10カ月後の病院設立に寄与しただろう。こうしたことは，北西航路の探険，インディアン対策などにもみられる。このように第2の意味での「有用な知識」は，まさしく「フランクリン的」といえるであろう。

第1，第2の意味での「有用な知識」を扱ったのが LCP であると考えられてきた。前述のように，Bolton は LCP を「熟練工を助けるための図書館」と考えた。ここからは，第1の意味での「有用な知識」を考えるのが妥当である。Thompson は，愛書，学識，宗教，道徳といったものではなく「実際的性格」を有するものとして，以前の図書館と LCP とを区別した。この場合「実際的性格」とは，第1，第2の意味での「有用な知識」を考えるのが妥当であろう。しかしこうした把握は，LCP および Franklin を理解するうえで，きわめて不十分である。以下において第3の意味での「有用な知識」を示し，同時に「図書館における近代の成立」を論じていく。その準備として，約1世代を隔てて活躍した国教会牧師 Thomas Bray の図書館思想[15]を，簡略にみておきたい。

3

SPCK, SPG の創始者として著名な英国教会牧師 Thomas Bray (1658–1730) は，主教代理としてメリーランド植民地を統轄し，同植民地を中心に多くの図書館を設立した。彼が設立した図書館は "parochial library" "parish library" あるいは "Bray's library" などと呼ばれ，

植民地時代の図書館史だけでなく，近代公共図書館成立前史を探る場合にも重視されている。クウェーカーへの異常な敵意，E. Stillingfleet といった神学者の重視，さらに「神学は学問的にも最も強固な基盤をもつ」という Bray の主張は，彼の世界観を示すものであるが，それは同時に Bray の図書館思想をも規定している。

クウェーカー対策は SPCK の主要な活動の一つであったし，Bray のメリーランド滞在はクウェーカーとの闘いであった。同植民地における国教会の公立教会化を妨げていたのもクウェーカーであった。そして，国教会とクウェーカーとの争いは，単に政治，経済面だけにとどまらない。両者は教義面あるいは世界観でも大きな相違があった。Curti は「牧師以外の人びとの宗教感情と直観とが神の真理の源であり，聖書の意義を明らかにする道である，という主張は，伝統と訓練された牧師と，教会の権威とを重んずる教会の威信を傷つけるものであった[16]」と述べる。内的光明によって各人の心の中にキリストを受け入れ，キリストと直接的に結びつくことをクウェーカーは重視する。これは聖職者を認めないことに他ならない。同時に，高位聖職者が順次下位聖職者を規定するという国教会のシステムを認めないことでもある。Bray が激しい敵意をクウェーカーにいだいた理由は，クウェーカーの考えが既存の社会的枠組を根底から否定するものであったからである。換言すれば，Bray が求めたものは，国教会教義による社会の安定であった。

次に，Stillingfleet といった保守派神学者の重視である。“parochial library” を支持した7名の高位聖職者の1人が，ウースターの主教 Stillingfleet であった。また，植民地に送られた図書のなかにも，彼の著作は多くみられる。Stillingfleet などが主張する素朴な生得論は，また Bray の考えでもあったろう。こうした保守派は「生得観念の存在を肯定し，神によって私たちの心に観念が文字通り記され，それが信仰と道徳の根底であると，確信する人々[17]」であった。生得論[18]の主張は，超越的な真理を認めることであるし，既成秩序への盲目的服従を強いるものである。Bray が求めたのは，各人が社会の秩序をあるがままに理解し，自己に生まれた時に与えられたその位置において最善を尽くすことであった。こうした社会の秩序，あるいは固定的な世界観，宇宙像を理解するのに，神学は至上の位置を占めていた。政治学，経済学などは神学に従属していたのである。

“decanal library” と “layman's library” との比較は，Bray の意図をはっきりと示している。前者における神学書，宗教書の割合は60～70％であり，後者は100％であった。“decanal library” は興隆の兆しを示す諸学の業績を受身的に吸収することで，一般教区民を導く立場にある田舎紳士，田舎牧師の質を向上させようとする。教区民を指導する立場にある彼らには，他宗派との教義論争に打ち勝つためにも，他宗派の教義をも理解しなくてはならない。しかし，一般教区民にとってそうした知識は不必要であるだけでなく，混乱さえもたらすであろう。したがって，一般教区民を直接の対象とした “layman's library” には，国教会教義を簡明に解説した本のみを提供するのである。“layman's library” は，「近代」公共図書館の観点からすれば，4種からなる Bray の図書館構想のなかで最も進んだものであったとしても，「図書館における近代」という意味においては何ら進んだものではない。

4

Bray の時代は Locke の時代でもあった。Locke の『人間知性論』は，討論クラブ[19]をひと

つの踏台として完成された。Locke はこうしたクラブの規則を，1720年に刊行された著作集で示している。この著作を Franklin 自身が，1732年に LCP に寄贈している[20]。それによれば，入会希望者は以下の3点に同意し，かつ出席会員の2/3の賛成を得てはじめて会員になりうるとしている。

1）職業，宗派にとらわれず，人類全体を愛する精神をもつこと

2）宗教，議論上のことで，他人の肉体や名誉，所持品を傷つけないこと

3）真理のための真理を愛し，それを公平に発見し，相手に伝えること[21]

他方，1727年に成立したジャントーの入会規則では，以下の4点に入会希望者は答える必要がある。

1）会員にかつて何か無礼なことをしたか

2）職業，宗派にとらわれず，人類全体をまじめに愛するか

3）宗教，議論上のことで，他人の肉体や名誉，所持品を傷つけてよいと思うか

4）真理のための真理を愛し，それを公平に発見し，相手に伝えたいと思うか[22]

両入会規則の類似性は明白である。ジャントー成立については，Increase Mather, Cotton Mather の影響，滞英中のクラブでの体験などが重視されてきた[23]。それらは否定されるべきではないが，入会規則，運営規則などは Locke の考えを用いたのである。Locke は近代自然科学，医学の影響をうけ，そうした方法を人間の探究に用いていく。Locke が特に反対したのは，Stillingfleet（あるいは Bray）など保守派神学者が固持する素朴な生得論だった。生得論は「自分自身の理知と判断力とを使わなくさせ，教説をさらに検討せずに信じ，言われるままに信用させる[24]」ものである。前述のように，生得論の肯定は権威への服従をもたらす。その否定は「自分自身で考え，知る[25]」ということ，すなわち自立と探究とをもたらすのである。経験論を論ずるには，なによりもまず生得論の否定が不可欠なのであった。Stillingfleet と Locke の相違は，同時に Bray と Franklin との相違である。

さて，Franklin は『自伝』で LCP に言及し「また思うに，全植民地の住民がその権益を擁護するために，あのようにこぞって抗争に立ち上ったのも，幾分かはこれ [LCP] が影響によるものであろう[26]」と自負している。図書館史においてこの Franklin の言及は，もっぱら「会員制図書館が有した影響力」という観点から触れられてきた。しかし，いっそう重要なことは，この言及は Bray およびそれ以前の図書館思想からは出てこないということである。Bray にとって，政治学，経済学などは「神学の侍女」であった[27]。神学は，固定的な宇宙像と世界観を理解し，自己の位置を明確にとらえ，その与えられた位置で本分を尽くすということ，すなわち「理性的人間[28]」であることを理解するのに不可欠だった。旅行記は単にその内容を知識として受け取り，他国がいかに野蛮であるかを理解するのに役立つ。換言すれば，旅行記は「イギリスがいかに神の恩寵を得た国であるか」を知るのに貢献する。Bray において，旅行記は自国を満足げに振り返るものであった。LCP において旅行記は，他国と自国とを比較し検討すること，そして自国を改良することが期待された。Bray において，歴史書は旅行記と同じ扱いである。他方，LCP の場合，歴史書，政治書はこれから自国の方向(あるいは人類の方向)を決定するに際しての重要な判断材料となる。すなわち，図書は判断と行動をなす場合に直接的に関与してくる。過去は単なる過去ではなく，いまや未来との関連を有してくる。Bray は知識それ自体を栄光ある

ものとした。そうではなく，知識は人類の進歩をささえる強力な手段として重要になる。もはや Bray の思想とは明確に分離している。革命とか独立とか人間の自立といったことと，Bray の図書館思想とは無縁であった。そうしたことは，図書館に期待された役割が，意図どおりに機能しなかったことを示す。LCP の場合はまったく逆であった。ここにおいて，知識を静的，受身的に吸収するという固定的な考えとは決別している。経験は実験的になる。経験はよりよい経験を導くための指標あるいは方法を示すものとなる。それゆえ「経験にもとづく観察，実験をし，それを組織的，体系的に記した知識」は重要となる。この第3の意味での「有用な知識」を含む図書は，人類の進歩にとって不可欠であり，こうした知識を得ることが LCP の主要な目的とされたのである。もはや，形而上学的，神学的知識は無意味であり，人間の無力化と権威への服従をもたらすものでしかなかった。わずか1世代を隔って，当時の代表的図書館思想である Bray と LCP とのあいだには，世界観，人間観，哲学の相違がみちびく，決定的な断層が存在したのである。

5

既述のように，Brooks はアメリカ人を「高級な人」と「低級な人」に分け，前者の代表として Edwards を，後者の代表として Franklin を挙げた。しかし，両者が全く相反する哲学に至ったとしても，全く相反する哲学的基盤から出発したのではない。両者ともに Newton 哲学を重視した。Edwards において Newton 哲学は，予定説を補強する役割を果した。他方，Franklin は F. Bacon から Newton に至る考えを，近代自然科学への道として受けついでいく。帰納的方法，仮説の設定とその検証，観察にもとづく実証的な探究といったことが重視される。こうした研究方法への方向は，1662年王立協会 (Royal Society)の設立によって，制度的に確立されていく。アメリカでは，ジャントーを経てアメリカ学術協会 (American Philosophical Society, 1744年創立)によって結晶化される。しかし，近代科学の精神を最初にかつ具体的に体現したのは，アメリカでは LCP にほかならない。

蔵書構成をみると，最初の注文リスト47種のうち11種は科学書であり，他方神学書，宗教書は皆無だった[29]。1741年目録をみても，科学書は18%を占め，神学書，宗教書は9%でしかなかった[30]。これらは LCP の顕著な特徴といえ，たとえばハーバード大学などの蔵書構成と比較すれば，その相違はきわだっている[31]。ここには，旧来の世界観，哲学からの離脱がはっきりと認められる。と同時に，近代自然科学への道を積極的に歩もうとする姿勢が窺われる。この場合重要なものは LCP のもつ実験室，博物館としての役割である。従来，図書館史においてこの側面は見逃されてきた。LCP の設立意図を理解した領主たちは，空気ポンプ，望遠鏡，顕微鏡などを LCP に寄贈した[32]。また，領主 Thomas Penn は電気を起こす器具を寄贈するが，これは LCP のロンドン代理人といえる Peter Collinson (王立協会会員)から贈られた電気管 (electric tube) などとともに，電気の研究を進めていった。この電気管への感謝の念，および実験結果を示す書簡が，Franklin から Collinson に送られている。そこでは「説明書を添えて贈ってくださった電気管で，私たちは実験をしました。そして，いくつかの新しいと思える現象を観察しました[33]」と記されている。「私たち」という語が示すように，LCP 会員 Thomas Hopkinson, Philip Syng などは，Franklin とともに電気の研究を強力に推進した。また1729年という早い

時期に Franklin とジャントー会員 J. Breintnall（後には LCP 会員）とは，布の色と太陽光線の反射との関連について，初歩的実験をしている。また，Breintnall と個人的に親しい植物学者 J. Bartram（LCP 名誉会員）などは，ロンドンの植物学者 P. Collinson と連絡をとりながら，植物学の研究に従事していた。さらに，T. Godfrey は数学の研究から四分儀の発明に進んでいった。実際，Franklin 自身が「現代は実験の時代[34]」と規定するように，LCP 会員は近代自然科学への道を歩みだし，LCP は科学研究所，科学情報蓄積の場，情報交換の場としての側面を有していたのである。

1739年に Bartram は，王立協会に対応する学術協会（Learning Society）をフィラデルフィアに設立すべく，その意図を Collinson に伝えている。Collinson は時機尚早であると指摘すると同時に，「LCP はそうした協会に向けての企て（essay）であるように思える[35]」とロンドンから返答する。この協会は Franklin が1743年に発表した『有用な知識を広めるための提案』をうけ，翌年アメリカ学術協会として成立する。協会での役員，研究者はほとんどが LCP 会員であった。会員の研究結果は『王立協会会報（Transaction)』に掲載され，逆に LCP は『会報』を購入すること，さらに広範に自然科学書を購入することで進展していく。電気学，植物学，天文学，数学，建築学，医学などの本が，積極的に LCP によって買われていった。あるいは，会員が個人的に所有していた。LCP は近代自然科学を進展させていくための武器庫とさえいえた。LCP が有するこうした側面は，「図書館における近代の成立」を具体的に体現したものとして位置づけられよう。

LCP が建前として会員制でありながらも，非会員に便宜を提供していたことは，すでに明らかになっている。それに加えて本稿で強調したいのは，LCP がさまざまな実験を広く地域の人びとに知らせていこうとする姿勢を有していたことであり，また博物標本を一般に公開していたことである。Franklin はCollinson に以下の報告をしている。

> この電気の研究ほど私を没頭させたものはありません。ひとりの時は常に実験をしています。そして，友人，知人に実験をくり返すのです。新奇さのため，常に多くの人びと（crowds）が実験を見に来ます。そのために，過去数カ月他のことは何もできないくらいです[36]。

また，空気ポンプは最大の見せ物といえ，だれもがガラス越しにのぞくことができた。時には，ポンプが活動しているのを見ることもできたろう。数学者 Greenwood は LCP の許可を得て空気ポンプを使用し，科学的，数学的な講演に利用した。1811年に至っても，B. Tucker は講演に空気ポンプを使用し，翌年にも同じ目的のため，ポンプの使用を LCP に願い出ている。さらに，実験器具，博物標本などは週一度無料で公開され，科学的才能のある人には研究の機会を提供し，地域住民には彼らの文化的な枠を拡大していくことに貢献した。

ところで，電気の研究自体は実用的というよりもむしろ「理論的」であり，避雷針の発明に至ったことはいっそうよいことであった。Franklin の電気に関する研究を理論的とみるか否かは，若干意見が分れようが，いずれにしても避雷針，すなわち単なる直接的な社会的有用性のみで Franklin および LCP を把握するのは誤りを導くであろう[37]。滞仏中の1783年，Franklin は水素気球をあげる実験をみた。それはたいへん人気を得ていたが，その有用性が疑問視された。ある人は「いったい気球が何の役に立つのだろうか」と問題提起をした。Franklin は「出産直後の赤ん坊がいったい何の役に立つといえるか[38]」と反論した。Franklin は基礎的，原理的な

研究の重要性を知っていた。こうした研究が，将来において大いに役立つであろうことを，彼は理解していたのである。前述のように，経験をとおして観察し，そこでの現象を実証的に秩序だてて記した知識を「有用な知識」としたのである。この第3の意味での「有用な知識」こそ，Franklin あるいは LCP が第2の意味での「有用な知識」に劣らず重視したものであった。そして，その知識は，人間の進歩と人類の福祉とに目標が合わされていたのである。

結論を急げば，Bray と LCP との世界観が全く異なるということであり，このことが図書館の目的，蔵書構成，ならびに図書の意味の相違をもたらしているということである。Bray の思想は「近代」公共図書館の観点からすれば，いくつかの考慮すべき要素がでてきていた。しかし，「図書館における近代の成立」という観点からすれば，否定され乗り越えられるべきものであった。本稿では，特に LCP における図書の扱い方，あるいは自然科学にたいする姿勢を探ることで，Bray の前近代的な図書館思想との決別を明らかにした。LCP は「図書館における近代の成立」として評価されるべきであるし，さまざまな視点から解明される必要があろう。

LCP は「近代」公共図書館の思想的起源という扱いがされてきた。下層中産階級の人びとが金を出しあって設立した図書館であるとか，会員制ではあるが非会員にも図書の利用を許可していたといったこと，あるいは，第1，第2の意味での「有用な知識」を重視した図書館として評価されてきた。しかし，会員制図書館の思想，すなわち貧しい人びとが金を出しあい力を結集するという考えは，何ら Franklin を起点とするものではない。筆者は，こうした考えが Bray の図書館構想の中で明確に展開されていることを既に指摘した[39]。このことは，従来のような「近代」公共図書館成立前史においては，Bray と LCP とが連続的に把握されうることを示している。しかし，本稿で示した観点によれば，両者のあいだに決定的な相違があるということである。

注

1) Tyler, M. C. The Historic Evolution of the Free Public Library in America and its Function. *Library Journal* Vol. 9 (1884) pp. 40-47
2) 森耕一　図書館学の課題『大学図書館問題研究会シリーズ』No. 3, 1980, p. 11
3) Brooks, V. W. *America's Coming of Age*. Garden City, N. Y.: Anchor, 1958 (1st. ed. 1951) pp. 5-10
4) Rossiter, C. The Political Theory of Benjamin Franklin. *Pennsylvania Magazine of History and Biography*, July 1952, pp. 259-293
5) 例えば『フランクリン自伝』松本慎一，西川正身共訳，岩波，昭和32, pp. 92-93, 132～133 などを参照
6) ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』大塚・梶山共訳，岩波，昭和30
7) 下記の二つの著作をもとにまとめた。大塚久雄『社会科学における人間』岩波，1977(特に第3章)，福田歓一『近代の政治思想—その現実的・理論的諸前提』岩波，1970(特に第3章)
なお，Weber の捉え方と対立するものではないが，クウェーカー（フィラデルフィアはクウェーカーが建設した「友愛の町」である）の商人倫理を重視する立場がある。これについては，Tolles, F. B. Benjamin Franklin's Business Mentors. *William and Mary Quarterly*, 3rd. series, 1947, pp. 60-69 があり，いっそう重要なものは同著者による，*Meeting House and Counting House*. Chapel Hill, N. C., 1948 がある。また，Franklin の経済倫理がアメリカ史にあたえた影響を論じたものとしては，Wright, Louis B. Franklin's Legacy to the Gilded Age. *The Virginia Quarterly Review*, 1946, pp. 268-279 がある。

8) Thompson, C. S. *Evolution of the American Library History, 1653-1876.* Washington D. C.: Scarecrow Press, 1952. p. 35

9) Bolton, C. K. *American Library History.* Chicago: ALA. p. 8

10) この点については一致している訳ではない。例えば岸本幸次郎氏は「有産の中産階級」と把握している。岸本幸次郎　アメリカにおける図書館制度の発展『広島大学教育学部紀要』1958, pp. 274-248

11) Labaree, L. W. (ed.) *The Papers of Benjamin Franklin.* Vol. I. Yale Univ. Press, 1959, p. 259

12) 川崎良孝　公共図書館成立への思想的起源―フィラデルフィア図書館会社の成立を中心として―『図書館界』27巻3号，1976, p. 102

13) 『フランクリン自伝』前掲，p. 112

14) 以下，図書についての情報は，Korty, M. B. Franklin's World of Books. *Journal of Library History*, Oct. 1967, pp. 300-301 から得た。

15) Thomas Bray については以下の諸論文で論じた。川崎良孝　トマス・ブレイの図書館思想とその発展（I）（II）（III）『図書館界』29巻，1977，第3号 (pp. 75-90, 110)，第4号 (pp. 138～157)，第5号 (pp. 175-191, 215)；貸出図書館の思想的起源『図書館学会年報』23巻2号，1977, pp. 149-160

16) カーチ『アメリカ社会文化史』上巻　竜口直太郎以下共訳，法政大学出版局，昭和29, p. 103

17) 大槻春彦　イギリス古典経験論と近代思想『世界の名著―ロック，ヒューム―』中央公論社，昭和43, p. 19

18) 生得論については，Locke の『人間知性論』(大槻春彦訳，岩波，1972) の特に第1巻「生得思念について」を参照

19) このクラブについては，『人間知性論』p. 19. あるいは同書における大槻氏の「解説」pp. 289-291 を参照

20) 同書は1732年に寄贈され，LCP にたいする最も初期の寄贈書の一つである。なお，1741年蔵書目録を参照。この目録は1956年に記念出版されている。LCP *A Catalogue of Books Belonging to the Library Company of Philadelphia.* 1956

21) この規則は，"Rules of a Society which met once a week, for their improvement in useful knowledge and for the promotion of true and Christian Charity" である。Locke, John. A Collection of Several Pieces. London, 1720 (in *Works*. London 1823, Vol. X. pp. 312-314)

22) Labaree, L. W. (ed.) *op cit.*, Vol. I, p. 259

23) たとえば，Mather の "neighborhood benefit societies" に Junto 設立の思想的起源を求めているものに以下がある。Doren, Carl V. *Benjamin Franklin.* New York: Viking Press, 1938, p. 75., Grattan, C. H. *Amerian Ideas about Adult Education, 1710-1951.* Teacher's College, Columbia Univ., 1959, p. 15-17

24) ロック『人間知性論』前掲，p. 130

25) 上掲書，p. 128

26) 『フランクリン自伝』前掲，p. 113

27) Bray の蔵書構成論，学問論については以下を参照。川崎良孝　トマス・ブレイの図書館思想とその発展（I），*op. cit.*, pp. 135-136

28) 「理性的人間」については，福田歓一『近代の政治思想』*op. cit.*, を参照

29) 1732年に発注された図書注文リストの分析については，川崎良孝　公共図書館成立への思想的起源 *op. cit.*, (特に第3章1節)を参照。また LCP の現館長 Wolf は，1732年末に実際に英国からもたらされた図書の目録を作成している。Wolf, Edwin, 2nd. The First Books and Printed Catalogues of the Liarary Company of Philadelphia. *Pennsylvania Magazine of History and Biography.* Jan. 1954, pp. 45-69

30) 小倉親雄　フランクリンとフィラデルフィア図書館会社『図書館界』11巻3号，1959, p. 112。また1741年目録の分析は小倉氏の他にも試みられており，たとえば次のものがある。Wolf, Edwin, 2nd. Franklin and His Friends Choose Their Books. *Pennsylvania Magazine of History and Biography.* Jan. 1956, pp. 11-36

31) Sanford によると，1790年のハーバード大学における神学書の割合は49%，1791年イエールでは56%に昇っているという。Sanford, G.B. *Thomas Jefferson and His Library*. Archon Books, Conn., 1977, p. 108。また，Keys は北部植民地について「神学書からの脱皮はおそく，19世紀に入っても神学書が多かった」と全般的状況をまとめている。Keys, Thomas E. The Colonial Library and the Development of Sectional Differences in the American Colonies. *Library Quarterly,* 1938, p. 379

32) 科学器具については，科学史の分野でその歴史的意味が論じられている。特に，空気ポンプについては次の文献を参照。Lilley, S. 17世紀における科学器具の発達，Lindsay, J. (ed.)『近代科学の歩み』菅井準一訳，岩波，昭和35，pp. 63-76

33) Labaree, L.W. (ed.) *op. cit.*, Vol. III, pp. 118-119, 日付は1747年3月28日

34) 『フランクリン自伝』前掲，p. 260

35) Crane, Verner W. *Benjamin Franklin and a Rising People*. Boston, Brown Com., 1954, p. 43. なお Bartram の学術協会設立の意図については，Labaree, L.W. (ed.) *op cit.*, Vol. II, pp. 379

36) Labaree, L.W. (ed.) *op cit.*, Vol. III, pp. 118-119

37) Franklin の科学思想が狭い功利主義では把握できないことを，Cohen は強調している。Cohen, I.B. *Franklin and Newton*, Philadelphia, American Philosophical Society, 1956

38) Doren, Carl V. *op. cit.*, p. 700

39) 川崎良孝，トマス・ブレイの図書館思想とその発展，*op. cit.*,（III），特に“decanal library”を参照

（博士課程学生）